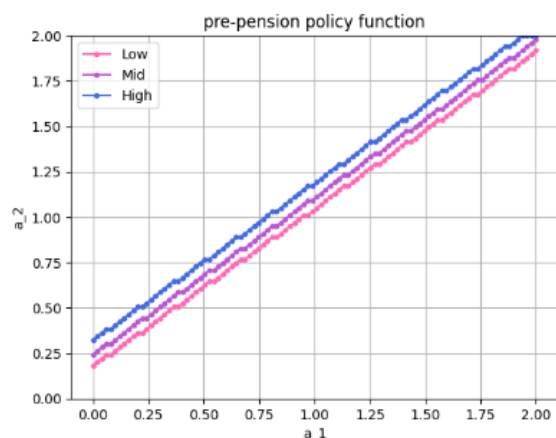


定量マクロ最終課題---Matsumoto Yui

1. 老年期には年金も所得もなく、貯蓄によって生活が支えられるので、若年期・中年期からの貯蓄の重要性が高い。よって、生産性の違いにかかわらず、貯蓄はお金（資産+所得）があるだけされる（必然的に労働所得の多い高生産性タイプの貯蓄が相対的に多くなる）。



[グラフの読み取り]

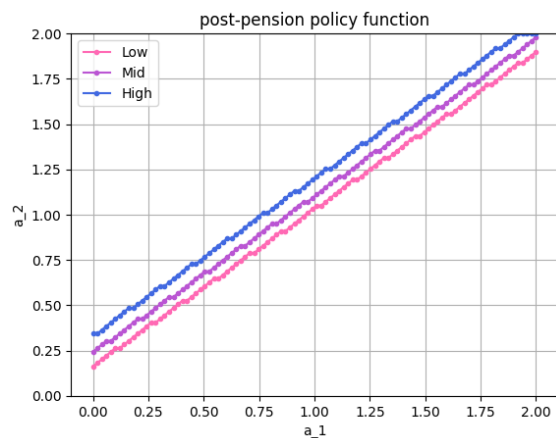
生産性が高いほど多く貯蓄されるが、生産性の違いにかかわらず貯蓄は行われる。若年期期初の資産が多いほど次期の貯蓄も多くなるという点でも共通している。若年期期初の利子を除く資産と次期の利子を除く資産との比率は、生産性が異なっても同じである。

2. 以下

中年期における政府の総税収：0.304297145

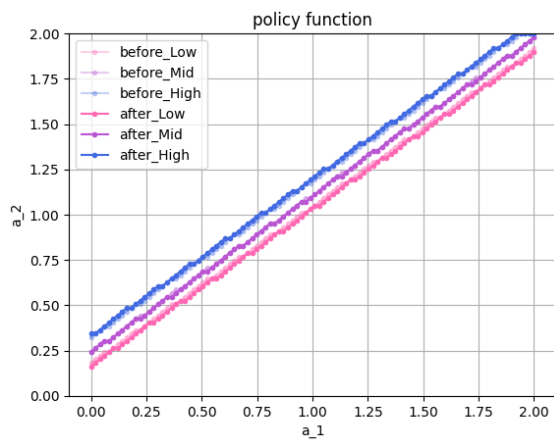
一人当たりの年金額：0.49862630453042994

3. 年金が導入されることで老年期の生活を貯蓄だけで支える必要がなくなるため、低生産性タイプにとっての貯蓄の重要性が減少する。年金が導入される場合、低生産性タイプは貯蓄を減らし、若年期・中年期での消費を増やす傾向にある。中生産性タイプの貯蓄行動は年金導入前後ではほぼ変化せず、少なくとも貯蓄を増やさない。対して、高生産性タイプにとっては自らの税負担に対して割安な年金となるため、老年期の生活水準を維持するために貯蓄を増やす傾向にある。



[グラフの読み取り]

年金導入前と比較して、政策関数の傾きはあまり変化していない。高生産性タイプ（青）は上に、低生産性タイプ（桃）は下に、中生産性タイプ（紫）は若干下に移動している。



[参考：年金導入前後の比較]

4. 「経済全体の平均期待生涯効用」は、年金導入によって増加するので、日本で年金の制度は維持すべき。具体的には、高生産性タイプの効用は若干下がるが、中・低生産性タイプの効用は上がるので、「経済全体の平均期待生涯効用」は年金導入によって増加する。

年金導入前： -1.53383305197885

年金導入後： -1.5299740972719191